「世界標準」の普遍的医療を東京で提供

⑫③ 千駄ヶ谷インターナショナルクリニック（東京都渋谷区）

待合室。ポスターを排除し、ディスプレイを設置。テーブルの上には日本語と英語、両方の新聞や雑誌、書籍が並んでいる

「しっかりしたハイレベルな英語対応がメイン。これは言葉だけの問題ではありません」

東京・千駄ヶ谷駅前。都心とは思えない閑静な一角に建つビル。その一室が千駄ヶ谷インターナショナルクリニックだ。冒頭に引いたのは篠塚規院長の言葉。クリニックのコンセプトを説く。

「米国はルールでつくった均一の国。ニューヨークであろうと、ピッツバーグ、ハワイであろうと、提供される医療は同じです。一方、欧州は極論すれば、国によって言葉も違えば、医療の姿勢もかなり違います。ドイツとフランスでは似ているところもありますが、全く違うところも多い。英国やイタリアも同様です。こうした医療文化の差異を理解している医療関係者は意外に少ないようです」

篠塚氏は日本旅行医学会の活動を通じ、世界各地の医療機関を見てきた。特に中国での経験は人後に落ちない。大連や北京、上海といった都市を7～8年前から回ってきた。篠塚氏の視点はあくまでプロフェッショナルに徹したものだ。バックヤードも含めた医療文化を現場で確認してきた。

「英語＝米国語ではありません。私は世界共通の医療言語としての英語と捉えています」

クリニックが入居するビルの入り口。看板がなければ、それとは気付かないかもしれない

ミーティングルーム。院内の家具はオカムラ製で統一しているが、この部屋のものだけはデンマーク製

診察室。一般診療以外の時間帯も活用して、個々の患者にじっくりと向き合う

診察室の壁。感染症の分布を示す地図が貼られている

処置室。医療機器や設備は必要最低限のものを厳選してそろえている

医学書と並んで世界各地の医師や病院、医師会から贈られた記念品が飾られている

患者は各国の在日大使館職員や日系企業やグローバル企業に勤める外国人ビジネスパーソン、東京都内のホテルに宿泊する外国人観光客など。大使自身が患者という国も数カ国ある。

クリニックが目指す医療はどのようなものか。

「質の高い医療です。半ば冗談ですが、Q&Aと言っています。quick and accurateの略です」

腰の痛みを訴えたある外国人患者。まず、英語が通じない。診察券を作るまでに時間がかかる。整形外科に通され、1時間待ち。中待合でさらに1時間。看護師が来て、医師が現れるまでに1時間。

「これが東京の医療の現状です」

都内のホテルの状況も厳しい。かつては医療ニーズにも対応できる通訳を常時雇用していた。だが、旅行業界は今やインターネットを介した値下げ競争の真っただ中。人件費は削減の一途だ。

「大使館関係者やいつもかかっている外国人、ホテルの紹介の患者は待ち時間なしで診ます」

受付から看護師までシステムとして一貫して英語対応できる医療機関は珍しい。昨年1年間で海外の保険会社の査定で認められなかった例は皆無。

「世界標準の医療を提供しています」